

エリザベス・キースとウルリック・ヴァン・デン・ボガードによる芸術的媒介
～『タイムズ』紙・日本語及びロシア語別冊のイラスト（1914-1917）を対象に～

ピーター・ロビンソン

本発表では、二人の英国人アーティスト、エリザベス・キース（1887-1956）とウルリック・ヴァン・デン・ボガード（1892-1972）が『タイムズ』紙の日本語別冊(*TJS*)及びロシア語別冊(*TRS*)のために作成した個性豊かな単色の線画が、両誌の芸術的魅力を高めただけでなく、20世紀初頭のイギリス、ロシア、日本を舞台に、当時、混迷を極めた帝国言説の多義性と複雑性を表現する上で重要な役割を果たしたことを解明するものである。まず、キースが用いた日本の木版画や浮世絵の表現様式が、日本の主要な植民地であった台湾と朝鮮に対する彼女の政治的かつ精神的な共感——これは、東京の華族会館で開催された彼女の作品展と、それに伴って出版された *Grin and Bear It* (1917)にすでに潜在していたⁱ——を覆い隠すものであったことを指摘する。キースは日本の芸術に対して賞賛の念を抱いていた一方で、同国の植民地拡張の野心に従属させられた人々に直感的に同化してしまうという矛盾をはらんでおり、これは彼女の芸術構成に内在する矛盾にも反映されている。*TSJ*の線画との比較から、東洋の生活を素材とした彼女ののちの肖像画印刷は、人物にポーズをとらせるなど入念な工夫を凝らしたことが見受けられる。衰退しつつある日英同盟の活気を回復させようというキャンペーンのもと、キースが *TJS* に寄せた数多くの作品は、日本政府からの正式な支持を得ていた。また、親日プロパガンダを報じたとして『タイムズ』紙が受けていた批判に対し、英国外在住者としての彼女の視点がもつ「真正」性や親日性が、同紙の信頼性を高めるために折り込まれたのである。一方、ロンドン拠点の芸術家兼新聞記者、ウルリック・ヴァン・デン・ボガードの *TJS* 及び *TRS* への貢献は、新聞業界入り直後の彼の状況から理解する必要がある。ボガードはまず、『タイムズ』紙史上に名高い *History of the War* を世に出し、続いて同紙初の芸術編集者を任された。写真と自身の芸術的想像力をもとに描かれたボガードのイラストは、鮮明さを抑えつつも一貫したスタイルを持ち、英国企業がロシアでの商業的好機に目覚めるよう時の新聞王ノースクリフ卿を促しただけでなく、英国の大掛かりな帝国事業を支持する複数紙にも採用されたことで、帝国抗争の様々な局面を映し出すこととなったのである。

ⁱ 1917年11月22-24日に開催された。